

令和三年の聴き初め

川口 ひろ子

今年の生演奏聴き初めは一月二十七日、モーツアルトの二六六回目の誕生日であった。現在欧米で人気沸騰中の若手ソプラノが来日するというので期待したが、昨年末に出された「外国人入国禁止令」によりキャンセルとなった。

代わっての登場はメゾ・ソプラノのベテラン加納悦子さん。ケルン歌劇場をはじめヨーロッパ各地で活躍した後に帰国、以降、新国立劇場や各地のオペラハウスに出演。昨年末にはNHK交響楽団のベートーベン「第九」公演でソリストを務めた実力者だ。このリサイタルが素晴らしかった。

全てモーツアルトの作品で、彼が十二歳から三十五歳死の年までに作られた曲だ。前半は多種多様なファルセット（裏声）を使った歌曲、後半は「別離」をイメージした大曲という2部構成。圧倒的な企画力、歌唱力、演技力を持つ加納さんの主張が感じられるプログラムだ。

前半のコミカルな「老婆」が楽しかった。加納さんは瞬時に老婆に変身、「あたしの若い頃はいい時代だった……ところが今ときたら……」としきりに嘆く。明るめの美声は時々ひっくり返り、陰険で哀れな老人というより、何かブツブツ呟いている可愛いお婆さんの姿だ。私は何故かほっとした。

後半の「どうして貴方を忘れられよう」に酔わされた。

モーツアルトが、恋人のソプラノ歌手ナンシーがウィーンを去りイギリスに帰る時に贈った大曲だ。「心配しないで愛する人よ 私の心は何時も貴方のもの……」と激しい思いを綿々と歌いあげる。豊かな感情表現は、年末の「第九」のかなり抑えた歌唱とは大違い。今一番脂の乗っている歌手の渾身の力を込めたサイタルとなった。

「今般の大変困難な状況の中で開かれる演奏会で、私も皆様も音楽の素晴らしさを感じるこゝとが出来ますようにと心を込めて歌います」。プログラムに寄せられたメッセージも嬉しい。

令和三年の聴き初め、私はピンチヒッター加納さんの豊麗な歌声を全身に浴び、コロナの憂鬱も忘れて、至福の時を過ごした。